

第 183 回 Brown Bag Lunch Seminar 報告書

テーマ：国際公務員になるには II

講師：大野 徹雄 氏／ナイジェリア国連広報センター所長

日時：1月26日（月） 開場 13:15 講演 13:30－15:00 個別相談会 15:00－

今回の BBL セミナーでは、ナイジェリア国連広報センター所長の大野徹雄氏をお招きし、国際公務員としてのご自身の経験を踏まえて、国際機関で働く魅力や今後の展望などについてご講演いただいた。その後、外務省国際機関人事センターによる個別相談会を併せて実施した。

国際公務員になるまで

大学の指導教授から国際公務員になることを勧められたのがきっかけで、国連を就職先として考えるようになった。40 年前の当時、日本では国連機関に入るための確立された情報収集のシステムがほとんどないに等しかった。しかし、日本が国連に加盟した当時、父親が国連駐在記者として単身ニューヨークに滞在し、その時の国連での経験の話を聞いていたことがあったことなどから、国連という組織がどのようなものかについてはいくらか理解していた。イギリス・日本で大学院を修了した後、アルバイトとして国連大学に勤務し、後に現地職員として採用された。

しかし、現地職員での採用では専門職員（プロフェッショナル）にはなれないことがわかってきたため、国連大学を退職し、ヨーロッパ共同体（現在の EU）駐日委員会に 10 年程在籍した。その間、国連機関の空席募集があれば応募し、OECD も含め何回かは海外での面接にも招かれた。国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）や国際連合カンボジア暫定統治機構（UNTAC）からオファーを受けたこともあったが断った。東京の国連広報センター（UNIC）に 8 か月程勤務したところ、外務省国際機関人事センターからすすめられて国連本部の空きポストに、応募したら採用された。国際公務員になることを考えるようになってから、ニューヨークの国連本部にいくまでに、実に 25 年もの時間を要したことになる。

国連での仕事

国連本部では、はじめ広報局（DPI : Department of Public Information）の Programme Evaluation and Committee Liaison Unit という部署に所属し、同局の活動を評価する仕事を担当した。自分が書いた文章が事務総長の年次報告（Annual Report）に掲載されるなど、仕事にはやりがいを感じていたが、その一方で、大組織のなかで自分がどんな仕事を担っているのかよく分からないという思いもあった。その後、国連がホームページを開設することになり、広報局長から仏語のホームページ作成を任された。当時はまだ Windows も HTML も知られていない時代であり、研修を重ねながら、チームでホームページを完成させた。

その後、フランス・パリの国連教育科学文化機関（UNESCO）に出向することになった。

当時、ユネスコ事務局長の特別顧問を務めていた元国連事務総長ハビエル・ペレス・デ・クエヤル氏の依頼で、**Cultural Development** というプロジェクトに携わった。パリで4年間勤務した後、DPIへ戻ることになり、今度はパキスタンの首都イスラマバードにある国連広報センターに赴任した。隣国アフガニスタンでのタリバンの崩壊で国内情勢が悪化し、広報センターの仕事が繁忙となっていたため、手伝ってほしいとのことだった。5年後、パキスタンでの任務を終え、現職であるナイジェリアの国連広報センターに異動した。国連での仕事は、広く世界のために役に立つことをしているというやりがい大きいと言えるかもしれない。

国連職員を目指す人へ

今は、外務省国際機関人事センターが大変有効な国際公務員の採用に関するアドバイスをを行っているので、国連職員を目指す人は大いに活用すべきである。国際機関への応募に当たっては、自分の専門を特定する必要がある。応募書類を提出時に虚偽の記載をして採用された場合、後で自分が苦勞することになるため、事実には偽りなく記載しなければならない。ただし、多くの応募者の中から選ばれるためには、月並みなことを書いていても駄目なので、人の心を動かすような書類を作成する必要がある。国連本部事務局では、事務局用語 (*working language*) 3ヶ国語 (英・仏・西) のうち一つの言語を使えなければならないが、さらに公用語の6ヶ国語 (英・仏・西・露・中・アラブ) のうちのひとつを使えばなおさら良い。仕事を始めてから語学研修を受けることも可能だが、あらかじめもう一言語を習得していた方が、採用時点にメリットがあると言える。

日本は国連の拠出金に対する職員数が少ないので、日本国籍を持つ人の場合、訪日する採用ミッションだけでなく、各国連機関本部の空席情報でポストを選び直接応募して採用される可能性も十分ある。職員の採用条件に関して、給与体系自体は統一的なものだが、勤務条件や待遇が職場・機関によって異なる。契約内容についても、応募するポストがプロジェクトに基づくものかどうかなど、あらかじめ確認する必要がある。一度仕事をすれば次に繋がることも考えられるが、各人の能力などにも関わることなので、ケースバイケースであることを十分認識する必要がある。

国連本部の職員とフィールドの職員との連携が上手くいっていないと指摘されることがあるが、フィールドの仕事を希望している人にとっては、本部では期待する仕事ができないかもしれない。国連平和維持活動 (PKO) の仕事も考えられるだろうが、オペレーションが終了する前に次の雇用を確保しておかないと、活動が終了した後次の職がないという状況に直面する可能性もある。

日本ではあまり馴染みがないかもしれないが、国連職員は時として他職員との激しい競争を強いられる可能性もあるうえ、仕事の困難さに対応できる強靱な精神力も求められる。だが、これは上司や本部との連絡を密にとっていけば乗り越えられることでもある。また、人種・宗教・文化も含めて様々な人がいるということを認識し受け入れ、その上で国連が掲げる目標を達成するために努力することが重要になってくる。 (了)